

## 二等船室

井上詠

船が岸壁を離れるときは船体が軋んだ。どろどろと錨が鳴った。二等船室に、海の唸り声に似たエンジンの音がしのびこんだ。

船内はあまり混んでいない。それでも正史まさしの眼の前で、体操選手のように手足を大の字に広げて寝そべった男は、うす目をあけて周囲の様子を窺っている。安心のゆく時刻ときまで場所を確保しようというのである。中腰のままじれてる痩せた女は、どこに腰を落ち着けばいいか決めかねている風である。ところどころでもう弁当が広げられ、罐入りのビールを飲んでいる。胡麻塩頭の男の傍で、セルロイドの眼鏡をかけた初老の女が巻寿司を頬ばっているのが見える。

正史は壁にもたれ、二本目の煙草に火をつけた。うすいピニ

ールの膜が体を包み、その中で正史の脳髄がぬるま湯のように揺れていた。先程の事件も水にほだけて輪郭がはっきりしない。今日はいつになく早起きをしたから、きのうの夢の読きを見ているのかもしれない——そう思うと自然に、唇に子供のような微笑が泛んできた……。

七月の中旬だというのに肌寒い朝だった。梅雨つゆの名残の雲が夏の陽射をさえぎり、この数日は日中の戸外にさえ歯ぎれのよい明るさがなかった。

久しぶりに大和路を歩いてみようと思いついたのは、大学の授業にも休講が多くなったからだ。それに、水に濡れたような空は古都を散策するのに却って都合がいい。和歌山港まで

船に乗り、電車で難波に出て別の私鉄に乗りかえると、二時前には奈良に着く。佐保路に眠っている古仏を訪ね、翌日は山の辺の道を北から辿って、余裕があれば桜井から長谷寺にまで足をのばす考えだった。三、四日の間の宿泊費は、この数カ月アルバイトで貯めた額で間に合いそうである。

「……正ちゃん、またお寺を見に行くんか。英文学やってるいうんに、なんで年寄りみたいにお寺ばかり見てまわるんや？」

玄関のたたきに立ったとき、母親は恨みがましい声でそう言った。正史はそのとき、いつものように曖昧な返事をした。まっすぐに答えない方がよかった。真面目に話して通じたためしはなかったし、いくら話しても、話は必ず末節のところへ入っていった。行き着く先には、「就職のことはどないするんや」という言葉が待っている。その言葉を、自分自身を憐むような声で言うのが、五十年以上も生きた人生から汲みとった母親の唯一の処世術のようなものだった。べとべとと粘り着く声が、正史は特に嫌いだっただ。

「……とにかく、体には気をつけるんやで。食事も、ちゃんとして。きのうのように夜ふかしをしたら、あかんよ」

母親はそんな風に言うと、正史の手に無理やり一万円札を握

らせた。それは、今朝家を出る直前のことだった。

K汽船の待合室のコンクリートの床には、冷い朝の膜がかかっていた。「平山正史、二十五歳、学生」と乗船名簿に書き、窓口で二等の切符を買いながら、今度からもっと早く起きて並ばなければいけないと考えた。出航予定時刻の八時まで五分ほどしかなかった。長い埠頭を小走りに走っているうちに転びそうになったのは、ロープにつまずいたからだだった。太いロープは、人の足首に似ていた。

二等船室は全部で三つあった。船室というより、真中に通路のある大部屋という感じのする部屋である。扉を開けて中に入ると、畳敷にして八畳ほどの区画が通路の両側に続いている。一つ一つの区画は隔壁で仕切られていないから、部屋全体を見渡すことができる。それでも方々で、救命胴衣を入れる棚や下駄箱が死角をつくっていて、実際に通路を歩いてみないことには空いた場所があるかどうかは分らない。

最初の二部屋は、早朝の便にしては予想外に混んでいた。母親と同年配と思われる客が同じような顔で放心したように坐っていた。

三つ目の部屋は、だいぶ様子が違っていた。大した混みよう

ではなかった。かといって、すぐ腰を落ちつけられる場所が見つかるほどでもない。

二十メートルほど歩いたとき、目の前に白い花が咲いたような気がした。最初それはコロイド状の空気の固りのようにも見えた。何度か目をしばたかせるうちに、白い服の女性が引返してくるのが分った。背の高い人だと正史は思った。宙を泳ぐような格好で、いかにも重心が定まらないとでもいうように、その人は正史の方向に歩いてきた。肩のところまで柔かそうな髪が波打ち、白いワンピースが風を孕んで揺れている。

通路には、荷物をもった二人の人間がすれ違う場所がなかった。その人は何故かうつむいたまま、歩数でも数えるようにゆっくりと近づいてきた。ハイヒールをはいているために、心もち体が浮いて見えるのだと正史は思った。

この人が気絶したのはなぜだろうか――。

三本目の煙草に火をつけ、傍で眠っている女性を見ながら正史は考えた。ぶつかると、咄嗟に呟いたのは、ゆっくりと漂ってきた白い服が目の前で急にふくらんだことだった。甘い脂粉の匂いが鼻をついた。女性はふいに顔を挙げると、歎びと不安の入り混った眼で正史を見つめた。大きく開かれた蒼色の眼から、あっという間に焦点が消え、闇を吸いこんだように

瞳がかげった。糸の切れた操り人形のように体が崩れたとき、正史はもう勢いよく踏みこんでいた。それは、運動神経の鈍い正史にしては出来すぎるほどの機敏な反応だった。どきっという音をたてて旅行鞆が落ちた。相撲でもとるように組み合ったままあたりを見回すと、前の区画の左の隅に、ちょうど二人が横になれるくらいの空間が見えた。

女性の体は身長割には軽かった。こんなものかな、と正史は心の中で呟いた。ぐったりと、体を預けている人を抱いたまま、正史が手を伸そうとすると、エナメルの靴が滑り落ちた。見せ物を見るような眼で、黒い開襟シャツを着たやくざ風の男が見ていた。

「兄ちゃん、どないしたんや。まっ青やないか」

「だいじょうぶ。だいじょうぶですから」と怒ったように正史は言った。曖昧な返事をすれば、それをいいことにして近づいてきそうな気配がした。

ワンピースの裾がめくれ、長い脚が剥き出しになっているのに気づいたのは、大きな人形でも抜くようにその人の躰を横たえたことだった。あわててスカートの位置を直しながら、あの男はきっと見たんだろうな、と正史は思った。

気絶した女性はそのまま眠りこんでしまった。正史にはそれはむしろ都合だった。壁にもたれ、鞆のなかをさぐって、目薬と手帖と扇子の入ったポケットから、煙草とマッチを取り出した。早く煙草を喫って落ち着きたかった。ポロシャツの胸にもう一つポケットがついていれば便利なのにと、夏になるといつも考えることを考えた。

朝の光が射しこんでくる窓の下では、脚をのばした中年の女性が気持よさそうに眠っている。女は乳のあたりだけを隠し、両肩の剃き出しになった服を着ていた。脚だけは、白い厚い靴下でびっちり包みこんでいる。襟首でこわごわ鋭り立っている毛が、女の気性の荒さを何よりも雄弁に物語っている。肩幅の広い、それでいて肉づきのいい中年の女性である。冷房が体に悪いのなら、肩も冷るのが道理だから、カーディガンでも羽織ってほしいのに、と正史は思った。ザアザアという音がした。雑音のあいだから、「正面」「アウト」という声が聞えた。

船内が急に活気づいて、眼の前を、肌潤いのない瘦せた女が通った。横目で正史を見ながらその女が通りすぎると、入れ違いに、青いランニングシャツを着た五歳ぐらいの男の子が現れた。土の入ったプラスチックの容器を、その子は眠っている女性の横に置いた。

小太りの女はどうやら子供づれだったらしい。子供は容器の中から黒い虫を取り出し、独楽のように回しはじめた。ひとしきり回したあとで、急に思い出したように空中に放り上げる。大きさと形からすると、くわがた虫のようである。

この人が気絶したのはぼくの顔を見たからだろうか――。

正史は、白い服の女性とくわがた虫で遊んでいる子供を交互に見ながら考えた。そう考えるのは自分の自惚れで、先程の事件と自分との間には何の関係もない――そう思ったとき、ピシッという音が聞えた。テレビの音とはまるで違う、なまなましい音だった。妙に親密で、それでいてむごたらしい。きつとどこかで、子供がまた母親に擲られたのだ。何もこんなところまで来て鬱憤をはらすことはないのに、と正史は思った。

急に気分が減入ってくると、白い服を着た女性の顔が記憶の底から泡立ってき、あっと叫び声をあげた嬉しそうな眼が、眠っている今も正史を見ていそうな気がした。何気ない素振りや船内を見渡した視線を横たわった女性の上に落すと、柔い髪は心持ち褐色を帯び、華奢な手がみずみずしい。正史の坐っている場所からは向うむきになった顔は見えないけれど、牀の輪郭が白い服をあざむいて、驚くほど鮮やかに浮き立っている。汚れた絨毯の上に眠っている姿は、塵芥の川に降り立った鶴の姿

に異ならない。

二等船室の船旅は、他人と雑魚寝をするようなものである。

湿った靴下が目の前にとび出してくることもあるし、海の荒れた日は、吐き戻した食物の臭いが鼻先を離れない。女性はみな、どんな容貌の人でも横になるときは周囲を窺う。まるで周りの人間が、みんなして自分を見ているような気である。だから連れのない女性は、一等船室か、せめて特二等の部屋を利用するのがふさわしい。特二等なら、人の背丈ほどのシーツが並んでいて、他人と自分の位置が入れ替ることもない……。

「うーん」という声があった。

なだらかな肩が、いやだいやだと言いたそうに揺れると、白い靴下に包まれた足先に力があるのが分った。あくびをする猫のように細い指がしなるのを見て、正史は急に不安になった。——まさか起き上がるんじゃないだろうな。一体、何と言えがいいのだろう、と考えた。考えているうちに上半身がそり返った。長い白い躰が、あつという間に二つに折れ、眠りのなかに漬っていた首が胸の上に垂れた。だるそうな眼は、方々に汚点のある絨毯をさぐるように見ている。

空の瞳に、光が戻ってきたようだった。眼は何色なのだろう、気のせいかわからないようだ、と正史は思った。俯き加減に坐っていた女性は、急に撥けて首を立てると、眼を光らせた。ひょっと

すると又気絶するのかもしれないと思ったとき、体中に寒気が来た。

その人は、腋の下が見えそうになるくらい高く上げた両手で乱れた髪を直した。

「どうも、すみませんでした」と低い声で言ったのは、先程の事件を覚えていたからである。

年齢はおそらく三十を越えない。気味悪いほど美しい。透けた肌の下で、青味を帯びた血が動いているのが分る。それでも女性の美貌は、十五、六歳の少女の他人を撥ねのけるような硬い美しさではない。躰中に、生活のゆとりが滲み出ているのである。

「荷物は、そこに置きましたから……」

頬を赧くして正史が言ったとき、額に小さな虫がとまったような気がした。声は聞えた筈なのに、その女性は傍の赤い鞆を確かめようともしない。いまにも眠りの中に連れ戻されそうな顔を見ながら、何か話さなければいけない、と正史は思った。

「……あまり混んでいなくて、助かりますね。二つ、別の船室を覗きましたが、団体客なんでしょうね。ひどく混んでいました。……大阪へいらっしゃるのですか？」

いいえ、京都なんですよ、と、きまり悪そうにその人は言った。他の乗客に聞かれたくないのか、正史の耳元で、囁くように話す。

「京都ですか。京都はいいですね。……でも京都は、もうなくなってしまったんじゃないですか？」

落ち着くんだ、あわてるんじゃないぞ、と正史は自分に言いかけた。その人は不意を衝かれたようだった。放心した眼で正史を見、急に思い出したように頷いた。

「……どこへ行っても、自動車とテレビばかりでしょう。それに、海水浴にでも出掛けるように、人が押しかけますからね。

一昔前は、廃寺だったお寺も、いまは盛り場の賑いですから……。古寺を訪ねるのは、長い道を歩いているうちに、言ってみればまあ、心が昔に戻るんですよ。それを今は、スイッチをひねって野球の実況放送を見るようなつもりでいますからね。それもこれも、仕方がありませんか？ ははははは……」

悲しそうな眼でその人は船内を見渡した。やはり具合が悪かったかな、と正史は思った。「心が昔に戻る」というのは結構うまい言い方だったけれど、最後の笑い声が浮ついた。そんなことを考えながら女性の視線を辿ると、勤め人風の男がショルダー・バッグを枕に眠っているそばで、立ったままの子供が竹輪を囓っている。喉がいがらっぽいののは、煙草のもえさし

くすぶっているせいだった。杓の形の、ブリキ製の大きな灰皿が目の前にあった。その中に、夏みかんの皮と鼻紙が詰めこんである。灰皿が洗面器と同じくらい大きいのは、船酔いをしたときのことを考えて作ったのである。紙のような顔色をした人の枕元に置かれたブリキの箱を、正史は何度見たことだろう。無論そんなものは見ないに越したことはない。見たくはないものが、勝手に目に入ってきたのである。罐ビールを飲んでいる胡麻塩頭の男が、みかんの皮を押しつけ、くすぶっている吸い殻にビールの残りをかけた。多分二人に、気を利かせたのである。

「あと二時間ほどで、和歌山港に着くんですが、それからどうやって京都に行くか、ご存じですか？」

関西の地理に、おそらくその人は不案内なのだ。正史は見当をつけた。一体関西の女性は、もう少し恥し気がなく、押しが強い。そこへ行くと東京の人は、心の底はともかく表面は控え目な人が多い。それに、眼の前の女性には異国の旅行者の風情がある。船室を見る眼つきが、見ず知らずの国で、爪弾きにされたように覚束ない。

しばらく間をおいてその人は頷いた。それから寂しそうに笑うと、「どうも、ありがとうございました」と呟いてなだらかな肩をせずませた。

どこことなく正史は物足りない気がした。見ず知らずの人間に抱きかかえられたものだから極りが悪いのかも知れないけれど、そんなことはどうでもいいことなのだ、と思った。しかしそれ以上喋り続けるのは、女性の歓心を買おうとするようでやはり滑稽だった。

「絶好のチャンスであります」テレビの声が叫んでいた。その声につられて歓声が湧いた。朱のさした頬を正史の方に向け、その人は船内を眺めていた。正史は鞆の中から、昨晚読みさしのまま眠りこんでしまった小説を取り出した。白い服の女性から離れない視線を引き剥して、ぶつぶつと並んだ横文字の活字に向けた。

それは、イギリスの作家が書いた、小説家を主人公にした小説だった。中年の作家が、小説の冒頭から、自分の小説の登場人物と話をしていた。

「……アールズコートのパブで、私が初めてシーラに会った日——あの日のことを、無論あなたは憶えておいででしょうね。事によるとあなたの方は、何の気なしに、まあほんの気まぐれからそうしたのかも知れませんが、私の方は、自分の眼を疑うほど、びっくりしたのですよ。なぜってシーラは、私自身の、何と言うか、未来の姿のようでしたからね。薄暗い部屋の光りが、だんだん固って最後にろうそくの焰になった——まあ、そ

んな感じでした。だから彼女と話している間じゅう、私はまるで、神託でも聞いているように、気味の悪い、神妙な気分でしたのです」

「なるほど、それは知らなかったな。しかしその、ろうそくの焰というのは、私がお前を創ったときの様子と似ているな。いや、創ったというのは、どうも正確じゃない。お前は、言ってみれば、自分の躰を捜してきたんだものな、ブラッドレー」

——アールズコートは、ロンドンの西のはずれの一面である。しかし地図の上で知っている町も、実際に行ってみないことには正体は知れない。町の様子が分ったとしても、イギリス人がどんな気持で暮しているかは、イギリス人にしか分らない。

「……自分の躰を捜してきた……なるほど、そうですか……まあ、それはそれでいいとしましょう。それにしてもです、この私をパブに出没させたり、シーラと恋をさせたりして、結局あなたは何をするつもりだったのです？ まさか、運勢判断のために私を使ったのじゃないでしょう？ それじゃあんまり、ひどすぎますからね」

「いや、そんな風に言われるとだな、返す言葉がなくなるじゃないか。第一、小説家が小説を書くのは——お前には分らないかも知れないが——夜なかに夢を見るのとはわけが違う。だから、あとで「夢判断」というわけにもゆかない。したがってだ、

何と言うか、まあ、そうせざるを得なかったともいうところかな——」

……不思議なことに、近頃では英語の方が、すんなりと頭に入ってくる。最初ページを開いた瞬間の、几帳面な気狂いの絵でも見るような気分を押しきってしまえば、あとは住み慣れた世界に来たようなものだ。これは、どういうことだろうか。

「しかし、あなたがどう考えようと、です。私が現に、こうやって生きていることには変わりありませんからね。シーラに会ったときの私の気持ちにしても、必ずしもあなたの目論見通りというわけにはゆかなかったかも知れませんよ——」

不思議な小説であった。現実と夢のあいだの膜がどこかで破れている。こんな小説がとうとう陽の目を見る時代になったかと思うと厭気がした。見たくないものを無理やり見せられたような気分だった。

「あのう……」

濁った意識の詰った樽を、誰かが頻りにたたいていた。

「どうして……あんな顔をされたのですか？」

思いつめたように正史を見ているのは先ほどの女性だった。手をはせば届きそうなところに顔があった。それが、ヴェールに蔽われてもいるように揺れている。

「あんな顔、というのは……」

「私と、ずっと一緒だったような……」

ふくみ笑いを隠しながら、女性は言ったようだった。

「あなたとずっと一緒、という……」

間が抜けた顔をしているのじゃないか、と正史は思った。女の言葉がよく解らなかった。それが不思議だと言いた気に、その人は小首をかしげた。

「私と、何年も暮っていた、と仰有りましたそうでしたわ」

「いつのことですか？ それは……」

驚きの気持ちをこめて、芝居でもするように正史は言った。大勢の人が見ている前で、舞台の上に立ったのは、小学五年の学芸会が最後だった——そんなことを思い出した。

「あのとき、あなたが私を見て、マホ、と呟いたときのことですわ。それ以外に、長い間、私を見てくれたことがありませんか？」

どうにかして下さいなと言うように、女は上目づかに正史を見ていた。

「マホ、ですか？ いや、ぼくは何も言いませんが」

事によると何か口にしたのかも知れないと正史は思った。無意識のうちに、特にああいふ場合に口を衝いで出る言葉があるのかも知れない。

「そうですか」

失望と安堵の入り混った声で女性は呟いた。奇妙なことを尋ねたのを恥じているのか、その人の頬の桜色が先程よりも鮮かに浮き立った。自分ひとりの聴いた幻聴を、現実の声と取り違えたようである。初対面の正史がその女性の名を知っている筈はないから、その人は、自分の聞きたい声を勝手に聞いたのである。由縁ゆかりのある人に会いたいという気持が、声を連れてきたのである。

まだ諦めがつかないという風に、卵白色の服がところどころでふくらんだ女性は、天井を仰いで唸っているようだった。その視線が斜向いの正史をしっかりと捉えていることは、正史にも分った。

女性の睫毛は長かった。それがくっきりとカーブを描き、額に向ってのびる先に、生え際の産毛が光っている。それは幼い印象を与えた。形の良すぎる鼻梁は残忍な感じがする。

膝の上で手を組み、その人は右手の中指を忙しそうに動かしていた。漂白したように白い指が反りかえると、反動ですぐ左手の甲をうつ。意味のない動作はいつ果てるとも知れない。呪まじないでもするような指を見つめながら、静かな部屋で二人きりであれば、ピアノの鍵盤をうつような音が聞えてくるのだろうか。正史は思った。

とん、とん、とん、という音は、しかしピアノよりも優しい

音だった。人の躰の一部分が他の部分に触れて生れる音には、やさしい、曖昧なひびきがある。それは、霧の立ちこめた湖を、雨のしずくがうつような音である。水面に触れると拡がり、拡がるとすぐに静けさのなかに溶ける。やがて静寂の底から、再び、とん、とん、という音が、湖の精のように生れる――。

気持のいい雨の音を聴きながら、いつの間にか正史は湖のほとりにうずくまっていた。足元の土がぬかるんで、靴底を柔い手が撫でるような気がする。霧に霞んだ湖は、周りの針葉樹木の輪郭を隠すほどに広い。朝の冷い空気が清々しい心に寄り添い、いつまでも一緒だというようである。

ふいに風が立って、数珠をといたような雨が湖をうった。雨脚がはげしくなり、薄白い世界に濃い水煙が湧いた。水の上を閃光が走るのを見たとき、正史ははっとして我に帰った。青白い宝石の光りが、乳白色の湖面を裂いた。

白い服の女性はしなだれるように坐っていた。膝の上でおどっている長い指のうしろに冷い光りがある。それは花のように大きなダイヤの指輪である。

やはり二等の客ではなかったと正史は思った。何かの理由で、その人は二等船室に紛れこんできた。左手の葉指に指輪をしているのは既婚者だからで、マホという名を呼んだのは多分この人の夫に当る人だ。そう考えると、彼女の奇妙な言葉にも合点

がいく——。

「死んだ人に……」

「えっ？ 死んだ人に、ですか？」正史は叫んだ。渦にひきこまれそうになる躰をやっとのことで水面に保ちながら、手と足を動かした。あわただしく頭を働かせるうちに、ぬるんだ水のような意識に、きりきりと揉みこむような声が入ってきた。

「そう。死んだ人に、会えると思います？」

細い針金のような声だった。教師に教えを乞う生徒に似て、眼だけがあどけないその女性を見ながら、冷静にならなければいけないと正史は思った。事によるとどこか精神に異常をきたしているのかも知れない。出会いがしらに気を失ったことと言えないことではないだろうか。

「……死んだ人にですか？ そう、多分、芸術家などは、いつも会っているんですよ。芸術には、だって、生と死の区別がありませんからね。そんなことは当たり前だけれど、それにしても、なぜぼくに、尋ねられるのですか？」

何故よりによってぼくに尋ねるのだろうかという疑問は、言葉に出してみると、もっと尋ねてほしいという願望に変っていた。精神異常でも何でも、その人とできるだけ長く話していたいと願っている事実是否定できない。そんな自分が、なぜ自分にそ

んな質問をするのかと尋ねるのは矛盾したことだった。

「……あなたが、私の名前を呼んで下さったからです。それに、そう、あなたはまるで、そっくりだったから——」

「亡くなったご主人にですか」

喉元まで出かかった声をやっとのことで嚙みくだし、無関心をよそおって正史は言った。

「誰に似ていた、とおっしゃるのです？」

尋ねてみると、それは眼の前の女性との会話に終止符を打つような言葉だった。正史が誰に似ていたかについて、その女性がまず打ち明けそうにないことは勿体ぶった口調からも判断できることだった。世間にはそんな風に、肝腎なところまでくるとはぐらかす女がいる。事によると、長い船旅を慰めるために年下の男の心をもてあそんでいるのかも知れないと思うと、相手が美しいだけになおさら腹立たしい。腹立たしいからいっそう、自分に注意を惹きつけ、心の底まで覗いてみたい気がする。「わたしの話を、ほんとうに聞いて下さるのですか？」

訝しそうに女は言った。その言葉には、しかし少しもためらいがなかった。あなたと一緒にどこまでもゆくのですよという決意を隠して、正史の心を試しているようだった。

正史は一瞬狼狽し、思い出したように坐り直した。あなたのお話なら身の毛のよだつ話でも伺います。正史はそう言いたか

った。

「ああ、ぼくの方は構いませんよ。あなたさえ宜しければ……」

瞳を睜いて正史を見ると、女は舌先で唇を湿した。それから視線を落し、膝の上で手を組んだ。その指に力がいっているのが分かった。

「きっとわたくし、淋しかったですわ」

女は言った。

「……あのことがあってからというものは、自分が自分でないような、頼りない毎日を送ってきましたもの——。周りにあるものが皆、波の合間を漂っているような頼りない毎日を送りましましたもの。(そう言って女は首を横に振った)。テーブルもソファも、あの大きな洋服箆まで、床を離れて水に浮んでいるような感じでしたのよ。わたしもそのなかに混って浮いているような……そう、骨をぬかれた、と言えば、わかっていただけますわね。そんな覚束ない毎日でしたから、きっと、もう一度会って、この眼でしっかりと確かめてみたかったですわ。そういう状態が、ご想像になれますか？……いえ、そう仰有って下さっても無理なことなのですわ。一度は、諦めなければいけない、もう、きっぱりと諦めようと思っていましたのにね。まるで、別世界のことですもの——」

つむいだ夢をほどくように、ゆっくりと女は話した。正史は

思いのほか冷静な心で聞いていた。「ええ、分りますよ。無論、

分りますよ」と答えた言葉にも、心の動揺は感じられなかった。

「……ここは、二等船室なのですわね。やはり、そうでしたのね」

正史の顔に貼りついていて視線を剝すと、女は、垂直に保った首をゆっくりと回した。

「ほんとうはわたし、一等の切符を持っていましたの。それなのに、二等のこの部屋から声がしたものですからね……。あの扉を開いて、通路をまっすぐに歩いてくると、白い壁のところで行きどまりになった。そのとき、うしろから、まほう、まほう、って呼ぶ声がありましたの。井戸が吼えるような、低い声で、懐かしい名を呼んでくれましたの。そう、あれは、井戸が吼えるような声でしたわ」

「——井戸が吼える。なるほど、それで急に引返されたのですわね」

船内はとにかく喧噪だから、色々な音が混り合って増幅することがある。女の打明け話は、正史の想像した線をなぞっていた。ところどころに暗喩めいた比喩がはさまる点を除けば、ごく普通にありそうな話である。

「……そう。あれは、ずいぶん遠い声でしたわ。それでも、もうすぐなんだわ、もうすぐ会えるんだ、と思いつながら、ひとり

で、淋しい野原を歩くような気持で歩きましたわ。そして、しっかりとして、一歩一歩足をふみしめて歩いてるうちに、目の前にぼんやり、白い足元が見えてきましたの——。もちろん、すぐ眼を挙げる気にはなりませんでしたけれど……」

「それはやはり、怖かったからでしょう」

正史が口をはさんだとき、潤んだ女の目から、急に水分が干上がったようだった。ばさばさと臉をしばたたかせて、不審そうに女は正史を見た。

「怖かったからだろう」ですって？ ……どうしてあなたが、そんな風に仰有るのですか？ 今までにも、そういう気持になったことがありませんか？

怖いというより、夢が現実になるのを引きとどめるような気持でしたわ。いざ眼の前に現れてみれば、やはり見たくない、いいえ、見たいことに変わりはなくても、もう少し時間を置いて、心の用意をしたい、嬉しいことはあとまでとっておきたいというような気持だったんですわ」

「……しばらくの間、うつむいていたのは、そのためですね」

なるほどそういうものでしょうね、と正史が念を入れて相槌を打つと、安心したように、なだらかな声で女は続けた。

「ええ、仰有るとおり、しばらくの間は目を瞑つむっていましたの。それから、もう今は、自分の眼で見えよう、心で見えるのでは

なくて、この眼でしっかりと見てみようと思って、顔を挙げた——そのときに、はっきりと見えたのですわ——」

女は生唾をのみこんだようだった。形のいい喉元が妊まごんだ魚の腹のようにふくれ、再びすらりとした輪郭に戻った。

その女性が自分の眼で見たという人がこの世の人間でないことは、正史にはもう分っていた。死んだ人に会えると思えますかと尋ねたのは、死んだ人に会ったような気がしたからである。

「——死んだ人の顔が、見えたのですね」

正史は悠然と、心もち胸をそらせて言った。

「ええ、それが、あなたの顔だった。……ほんとうに、よく似ていましたわ。あんなによく似た人には、今までにも会ったことがありませんでした。」

ああ、やはり生きています。こうして躰をもって、二本の脚で立っているんだと思いましたわ」

「つまり、何ですわね、あなたが御覧になったというのは——」

最後の言葉を口にすることはやはり躊躇ちゅうちゆされた。それを早く言ってほしいと言いた気に、じりじりと正史を見る女の鼻梁にはうっすらと脂あぶらが滲にじんでいる。——もう少し話を引きのばす工夫はないものだろうか、と正史は考えた。死んだ女の夫の話聞き出すことには何の手柄てがみもない。それは、二人が船の中で偶然出会い、こうして言葉を交している幸運とは何の係りもない

ことだった。

「……その指輪は、ダイヤの指輪ですね。しかしまるで、光り  
の花のようにありませんか。それに不思議なことに、それを  
見ていると、霧の立ちこめた、ええ、霧の立ちこめた朝の湖が  
眼の前に浮んでくるんですよ。……その指輪にも、きっと思い  
出がおありなんでしょうね」

白い指は、長い割には肉づきがよかった。根元に向うにつれ、  
蛇の腹のようにふくらんでゆく指を正史は見つめた。その女性  
は、明らかな失望の色を端正な顔に浮べた。

「思い出ですか？ ……むろん思い出は、いつも多すぎるほど  
ありますわ。」

最後に見た冬の湖も、それは懐しいことに変わりはありません  
わ。でもさっきからお話している通り、わたしには、あなたの方  
がずっと懐しいのですわ」

眼の前の女性は、いつまでも死んだ主人の夢を見ている。そ  
うだとすれば、狭い心の中には正史の入りこむ余地はない。お  
そらくその女の主人というのは、湖でボートでも漕いでいる内  
に、事故か何かのために溺死したのである。そのボートに乗っ  
ていた連れの女性が眼の前にいる女性だったか、それとも例え  
ば愛人のような女性であったかということは、わざわざ聞き出  
すほどの値打ちもない。もう少し違った話をしてみたかったの

ですが、と頭の隅で呟きながら、正史は仕方なく口を開いた。  
「つまりあなたは、亡くなった御主人の顔を御覧になったので  
すね——」

正史の言葉は、はっきりと聞える言葉だったから、その女性  
の耳にも届いた筈である。白い、すべすべした化粧の施された  
顔には、しかし予期した反応が現れなかった。一瞬、闇に向っ  
て立つような呆けた表情が現れ、そのあとで、腹に据えかねる  
とでも言いたげな焦りを見せて女が言った。

「亡くなった主人ですって？ あなたが何故、そんなことを仰  
有るのです？」

「何故って……、それは……」

「主人が生きていることは、あなたもご存じじゃありません  
か」

難詰するような言葉には、心なしか嘲りの響きがこめられて  
いた。

「生きています、ですって？ 御主人がですか？ しかも、この  
ぼくが、それを知っている筈ですって？」

「ええ、生きていますわ。だって、死んだのは、主人じゃあり  
ませんものね——」

居直るように女が言ったとき、正史の顔から血の気が退いた。

蒼ざめてゆく顔を、女は身じろぎもせずには瞳をこらし、水槽の魚を見るような眼で見た。

「それじゃ、誰が死んだのだろう。いったい、誰が死んだのだろう——」

徐々に薄れてゆく自分自身の意識に追いつかざるように正史は考えた。逃げよう逃げようとするその意識のあとについて、狭い螺旋状の道を吸いこまれるように滑ってゆくと、熱っぽい頭の中で、ほほほほ、という声が洞窟の蝙蝠のように飛び交うのが分った。それは、あとからあとから際限もなく湧いて、息苦しくなるほど密に正史の周囲に立ちこめた。

これは一体どこから湧いてくるのだろうか、と呟いた正史の声を、井戸の底だ、井戸の底だ、という叫び声が掻き消した。薄闇のなかで瞳をこらすと、ぼんやりと白い顔が鼻先に現れた。顔の真中には口があった。唇の向うに、紫に染った歯と溝ほみのような歯茎が見えた。

「それじゃ、誰の顔だったのです？ あなたの御覧になった顔というのは……」

やつのことでそう言い終ると、正史の体は広い地面を残し、見る間に退いてゆく意識の波にのまれた。すうっと体が軽くなったりとき、ほほほほ、という声のし上って、わあん、わあんと頭蓋あたまを撲うった。

「——もう、おわかりでしょう？ わたくし——わたくしの顔だったのでしょうか？」

鋸で、誰かが骨を挽いていた。肋骨のあたりが熱くなって、いけない、船酔いだ、と咄嗟に正史は考えた。今ははっきりと、胃の中で何かが足掻いているのか分った。靴をひっかけて通路に出、洗面所に入っとうずくまると、待ちかねていたように、どろどろに濡れたものがとび出してきた。頭から爪先まで、体中を裏返すような力に、正史は喘ぎながら堪えた。

汚れた便器のなかには、母親が作った卵焼の屑が白米の粒といっしょに溜っていた。それを何度も何度も流しながら、正史は、目と鼻から滲み出してくる涙をハンケチで拭いた。喉の奥には、酸味のある汁が際限なく溜っていた。ハンケチにまでアイロンをかけることはないのにな、と方々に皺のできたハンケチを握りしめて考えた。

十五分もしゃがんでいると、いくらか気分が楽になった。ふらふらと立ち上り、船室に戻る道で、ぼくが船に酔うなんて珍しいことがあるものだと思った。それに、確かあの女は、ぼくの顔が、自分の顔に見えた、と言った筈だが……。

二人が坐っていた場所で、至るところにしみのある絨毯が色のあせた表面を見せていた。船室かぶに先刻さつの女性の姿はない。瀟洒なデザインの赤い革かわの靴も、白いハイヒールも見当らなかつ

た。

窓の下に、肩をかけた中年の女と、青いランニングシャツを着た子供が坐っていた。子供は、赤い箱から丸い菓子を取り出し、頻りに口を動かせる。その隣りで、胡麻塩頭の男がセルロイドの眼鏡をかけた女に話しかけている、やすりを擦るような声が正史の耳にも届いてきた。

ぐったりと体を壁に凭せ、煙草をとり出して火をつけると、胸いっぱい煙を吸った。何度も吐いたせいとか、みぞおちのあたりがきりきりと痛んだ。にもかかわらず、空の胃には、何かがつっかえている感触がある。

——女はここに寝ていた。それから眼を醒し、通路を歩いてるときいきなり後ろから声が聞えた話をし、そのあとで……たしか死んだ人に会えるかと尋ねた。湖でボートが転覆したという話は、あれはいつ聞いた話だろうか……古い井戸の話が、どこかにはさまっていたけれど、とにかく最後には、ぼくの顔が自分の顔に見えたというようなことを言った……。

「あのう……」

怖る怖る声をかけると、向うむきになって白い靴下を直していた女が振り返った。胡散臭いものを見るような眼つきで女は正史を見た。

他人に尋ねても仕方のないことだ、あれは二人の間だけの話

だったのに——。そう考え直すと、小太りの女に声をかけようとした自分に腹が立った。女はおそらく、靴下を直しているところを見られたとでも考えて、自尊心を満足させたのに違いなかった。

ざわざわと人声が立ちはじめた。青いランニングシャツの子供は、鞆の中に菓子箱をしまった。方々で、荷物をまとめる乗客の姿が見える。年寄も若者も、みな熟睡から醒めたような晴れ晴れとした顔をしている。正史は、もう一本煙草に火をつけ、さっきの事件を詳しく思い出そうとした。いま頭の中で整理しておかなければ、永久にどこかに消えてしまいそうな気がした。船室のなかに、ぼう、ぼう、という汽笛の音がはいってきたとき、夜鳥の啼き声に似ている、と正史は思った。

船が港に着く時刻であった。がらんとした二等船室が、K港に向う乗客で再びごった返すまでには、まだしばらく時間があつた。

(了)